第５学年３組　社会科学習指導案

【日時】令和６年７月 24 日(水) ９:20～10:05　【場所】５年３組教室　【指導者】本田　隆

本授業の参観の視点

多くの食料を輸入に頼っている日本の現状を捉え、これからの日本の食料生産のあり方を多角的に考え、新たな「追究の視点」を生かして議論をする姿をご覧ください。

１　単元名　食料自給率 38%？　どうするこれからの食料生産！

２　単元の構想

(1)　単元について

本単元は、我が国の農業や水産業について、外国との関わりや生産量、働く人の変化などを調べることを通して、38%と低い食料自給率は国民の食料を確保していく上で大きな問題であることを理解し、将来にわたって安定的に食料を確保していくために、これからの農業や水産業の発展について考えていこうとする態度を養うことをねらいとしている。

1960 年にはカロリーベースで 79%あった食料自給率が 2023 年には 38%まで低下している。我が国は食料を外国に大きく依存しているということである。中国など新興国の食料需要の伸びや異常気象による供給の不安定化、国際紛争などの不測の事態などを考慮すると、自国の食料を自給できない現状は大きな問題であると言える。近年の農業では、ＩＣＴ化や６次産業化が食料生産をめぐる諸問題を解決する方策として注目されている。水産業における栽培漁業も同様である。しかし、設備投資にかかるコストが高いハードルとなっており、どの方策も食料自給率の上昇につながっているとは言い難い。食料生産においては、消費者の意識が大きな力をもつ。どのような食料を購入するのかという最終決定権は消費者が握っているからである。今現在も安心・安全を求める消費者の声は国産の食料を支えている。だからこそ、これからの日本の食料生産のあり方を生産者や消費者などの立場から多角的に考えることが必要であると考え、本単元を設定した。なお、本単元で学習する「生産性や品質を高める努力や工夫」や「価格や費用」は、中学校で学習する単元「市場の働きと経済」につながっていく。

(2)　児童について

本学級の児童（35 名）は、庄内平野において効率よく大量に米を生産するための工夫や各種の漁法、養殖業について学習している。生産者の思いや品質を高めようとする工夫について理解している一方で、食料を購入することで食料生産を支えている消費者についての関心は低い。食料生産は、食料を購入する消費者も大いに関係していることを理解し、これからの食料生産のあり方を多角的に考える必要がある。

「水産業のさかんな地域」の学習では、日本はどの漁に今後、力を入れるべきかについて【実効性】【実現可能性】【持続可能性】の３つの「追究の視点」を踏まえて議論をする経験をしている。議論後に、自分達で設定した「追究の視点」は方策を考えたり、議論をしたりする際に便利だったと思うか尋ねたところ、「とても便利」「便利」と回答した児童は 28 名、「あまり便利ではない」「便利ではない」と回答した児童が７名であった。便利でない理由は、７名とも「３つだと数が多くて考えにくい」であった。しかし、「多くの視点から考えることで、自分達の考えをよりよいものにできたから」という旨を便利な理由として回答した児童は 28 名中、25 名と最多であった。「追究の視点」のよさは議論を整理し、焦点化できることにある。より多くの児童がその有効性を感じることができるような視点を設定する必要がある。

(3)　指導について

指導に当たっては、「つかむ」段階で食料自給率の移り変わりや諸外国との比較に関する資料に加えて、日本の実質食料自給率の試算について話し合うことで、何が問題であるのかを明ら

かにする。その上でパフォーマンス課題を設定し、学習の見通しをもつことができるようにする。「調べる」段階では、千葉県銚子市の栽培漁業と海のエコラベル、北海道・宮崎県におけるスマート農業や佐賀県・沖縄県の６次産業化の事例、食の安心・安全と新鮮さを消費者にＰＲする産地直売所について調べていく。国内においても農業と水産業の諸問題を解決しようと様々な取組がなされていることを確認した上で、食料自給率が高いアメリカと漁業先進国であるノルウェーの食料生産について調べることで、国土が狭い日本において多くの農作物を生産する難しさやＩＣＴ技術を活用した効率化と水産資源を管理する有効性に気付くことができるようにする。「高める」段階では、食料自給率の上昇を期して、これからの日本の食料生産のあり方を練り合っていく。なお、用いる「追究の視点」は、食料自給率を上げることができるか【実効性】と日本において実現できるか【実現可能性】に加え、生産者と消費者など多くの人が力を合わせることができるか【連携性】の３つをねらう。キーワードを整理し、本単元に応じた言葉で「追究の視点」を整理することで、【連携性】のような新たな視点が生まれるようにする。３つの「追究の視点」の基、互いの考えの賛成点や問題点、その解決策を議論することで、これからの食料生産のあり方の練り合いを可能にしたい。「広げる」段階では、社会参画の一つとして農林水産省九州農政局佐賀拠点（以下、ＬＰ）に児童が考えたこれからの食料生産のあり方に対する評価をもらえるようにするとともに意見文にまとめ、新聞社に投書する。

(4)　期待する「回遊する学び」について

本単元及び本時における児童の姿を小学校全体テーマの「回遊する学び」に関わる内容と資質・能力を関連付けたものが、**表１**である。

表１　期待する「回遊する学び」に関わる内容と資質・能力、児童の姿

	内容	資質・能力	児童の姿
ステージＡ 「同単元・枠組み」	「食料自給率 38%？どうするこれからの食料生産！」	・産業の現状や概要を捉え、これからの社会のあり方を考えている。 【思考力、判断力、表現力等】	・食料自給率の現状を捉え、国内外で行われている様々な取組を参考に、これからの食料生産のあり方を考えている。
ステージＢ 「同教科」	「日本の地形や気候」	・データを根拠に理由を考え、それを基に考えたことを説明している。互いの方策について議論している。 【思考力、判断力、表現力等】	・理由や根拠を明確にして考えを説明している。「追究の視点」を基に食料生産のあり方の賛成点や問題点、それに対する改善案を考えている。
		・我が国の範囲、地形、気候の概要や特色を考え、表現している。 【思考力、判断力、表現力等】	・日本のこれからの食料生産の在り方を領土の範囲や地形や気候の特色を踏まえて考えている。
ステージＣ 「他教科」	家庭科 「生活を支える物やお金」	・消費者の一員として、環境や資源などに配慮した買い物の仕方を考え、実践しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】	・生産者や消費者の双方の利益を考えて食料品を選択するなど、学習したことを買い物の仕方に生かそうとしている。
	算数科 「がい数で計算しよう」	・費用を概算で見積もるために、およその数でその大きさを捉えている。 【知識及び技能】	・コストを比較するために、費用を概算している。
	国語科 「みんなが使いやすいデザイン」	・目的に応じて資料を分類・関係付けて伝えたいを明確にしている。 【思考力、判断力、表現力等】	・図表やグラフを用いて、自分の考えが伝わるように提示する資料や提案文の書き方を工夫している。
ステージＤ 「実生活・実社会」	ＬＰへの提案と新聞社への投書 ニュースや新聞、スーパーマーケットでの買い物	・学習してきたことを基にこれからの社会のあり方を考え、これからの社会生活に生かそうとしている。 【学びに向かう力、人間性等】 ・見聞きしたことや体験を基に、これからの社会のあり方を考えている。 【思考力、判断力、表現力等】	・学習してきたことを基に日本の食料生産のあり方を多角的に考え、ＬＰに提案するとともに新聞社への投書を通して多くの生産者と消費者に発信する。 ・ニュースや新聞、スーパーマーケットで見聞きしたことや体験を生かして、これからの食料生産のあり方を考えている。

他者の発想との回遊では、自分と同じ考えの人だけでなく、立場が異なる人ともこれからの食料生産のあり方を考える。また、そのあり方はＬＰや生産者、消費者といった食料生産に関わる多様な他者と共に考えることでより社会全体を意識したものへ変容することが期待できる。

３　単元の目標と評価規準

(1)　単元について

我が国の農業や水産業における食料生産について、食料自給率や輸入など外国との関わり、食の安全・安心などに着目して調べ、まとめることで、持続可能な食料生産・食料確保、食の安心・安全が重要な課題であることや、食料自給率を上げることが大切であることを理解できるようにするとともに、我が国の食料自給率の上昇を期して、これからの農業や水産業のあり方を考えることができるようにする。

(2)　評価規準

ア　我が国の農業や水産業における食料生産について、地図帳や各種資料で調べ、適切にまとめ、我が国の食料生産は、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、これからの食料生産について、重大な問題を抱えていることを理解している。　【知識・技能】

イ　食料生産や食料輸入、働く人の変化などを捉え、食料生産が国民生活に果たす役割を考えるとともに、持続可能な取組、地産地消、技術の向上、人材確保などの食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、考えたことを適切に表現している。　【思考・判断・表現】

ウ　パフォーマンス課題の解決に向けて、調べるべき問いを考え、学習計画を立て、学習を振り返ったり、見直したりして意欲的に追究し、よりよい方策を考えようとしている。また、これからの我が国の食料生産にあり方について、生産者と消費者などの立場から多角的に考えようとしている。　【主体的に学習に取り組む態度】

4　単元の指導計画（全 12 時間　本時 11/12 時間）

次	時	主な学習活動（○）	指導上の留意点（・）	評価規準（◆）【観点】	回遊
一（つかむ）	1	○資料を基に気付いたことを出し合い、パフォーマンス課題を設定する。 【パフォーマンス課題】 日本は多くの食料を輸入に頼っており、自国の食料を自給できないことは大きな問題である。これからの日本の食料生産のあり方を考え、農林水産省に提案しよう。	・自給率の移り変わりや諸外国と比較、実質食料自給率に関する資料を提示する。	◆資料を基に日本が抱える食料自給率に関する問題を考え、表現している。　【思・判・表】	A D 他者
	2	○パフォーマンス課題の解決に向けて、調べるべき問いを考え、学習計画を立てる。	・パフォーマンス課題を解決するために何を調べるべきか問う。	◆パフォーマンス課題を基に問いを考え、表現し、解決の見通しをもっている。　【主】	A 他者
二（調べる）	3	○なぜ、銚子漁港では栽培漁業が盛んに行われているのか調べる。 ○海のエコラベルとはどのような取組か調べる。	・栽培漁業の図解や海のエコラベルのリーフレットを用意し、栽培漁業の仕組みや水産資源を守るための取組に気付くことができるようにする。	◆漁獲量を維持するための持続可能な漁業の取組やそれに関わる人々の工夫や努力、水産物の資源管理について理解している。　【知・技】	A B 他者
	4	○北海道と宮崎県では、どのようにしてスマート農業が行われているのか調べる。 ○佐賀県や沖縄県の６次産業化の事例について調べる。	・スマート農業や６次産業化の概要や取組の効果が分かる資料を用意し、より良い農業経営を進める工夫や努力に気付くことができるようにする。	◆農作業の省力化や人材確保、収穫量の増加など課題解決のためのスマート農業と６次産業化の可能性やよさを理解している。　【知・技】	A B 他者
	5	○国内の食料品のよさを知らせる取組には、どのようなものがあるか調べる。 ○日本の食料生産者の新たな取組について話し合う。	・産地直売所の事例を紹介したり、食料品の輸出額に関する資料を用意したりして、新たな取組について話し合うことができるようにする。	◆日本の食料生産者の新たな取組についてまとめ、話し合うことで、さらに考えを深めようとしている。　【主】	A B 他者
	6	○農作物の自給率が高いアメリカでは、どのような農業が行われているのか調べる。	・穀類の自給率や大規模農業、アグリテックの資料を用意することで、日本において実現可能な取組はないか考えることができるようにする。	◆アメリカの取組で、日本において取り入れた方がよいことがあるか意欲的に考えている。　【思・判・表】	A B 他者
	7	○水産物の自給率が高いノルウェーでは、どのような漁業が行われているのか調べる。	・漁獲量の推移や水産資源の管理、ＩＣＴを活用した漁業に関する資料を用意することで日本において実施可能な取組はないか考えることができるようにする。	◆ノルウェーの取組で、日本において取り入れた方がよいことがあるか意欲的に考えている。　【思・判・表】	A B 他者
三（高める）	8	○これからの食料生産のあり方を具体的に考える際や議論の際に用いる「追究の視点」を設定する。 ○これからの食料生産のあり方について具体的に考える。	・児童が必要だと思う「追究の視点」を児童の言葉で設定できるように、キーワードを整理する。また、既存の視点で使えるものはないか問う。	◆今までの学習を踏まえて、方策づくりや議論の際に用いる「追究の視点」について考えている。　【思・判・表】	A B D 他者
	9	○「追究の視点」を基にこれからの食料生産のあり方について話し合う。	・水産物２グループ、農業２グループを編成し、全体で話し合う準備ができるようにする	◆資料を基にこれからの食料生産のあり方について考えている。　【思・判・表】	A D 他者
	10	○これからの水産業のあり方について議論①（アとイ）を行う。	・「追究の視点」を確認し、視点に沿って議論を進めることができるようにする。 ・実社会の問題と解決策、理由と根拠が分かる提案ができるようにする。	◆理由と根拠に注目し、これからの水産業のあり方について「追究の視点」を基に議論することで、互いの考えの問題点をつかみ、改善案について考えている。　【思・判・表】	A B C D 他者
	11 本時	○これからの農業のあり方について議論②（ウとエ）を行う。	・「追究の視点」を確認し、視点に沿って議論を進めることができるようにする。 ・実社会の問題と解決策、理由と根拠が分かる提案ができるようにする。	◆理由と根拠に注目し、これからの農業のあり方について「追究の視点」を基に議論することで、互いの考えの問題点をつかみ、改善案について考えている。　【思・判・表】	A B C D 他者
四（広げる）	12	○これからの食料生産のあり方について意見文を書く。 ○学習を振り返り、感想を書く。	・ＬＰに意見文を送付し、評価をもらうことで再度検討できるようにする。 ・新聞社に投書することで、多くの消費者と生産者の目に留まるようにする。	◆議論の中で明らかになった問題点やＬＰから指摘された点を踏まえて意見文を書いている。　【主】	A B C D 他者

５　本時の指導（11/12）

(1)　指導目標

食料自給率を向上させるためには、これからの日本の農業はどうあるべきか、「追究の視点」を基に議論することで、自分の考えと相手の考えを共に深めることができるようにする。

(2)　評価規準

イ　理由と根拠に注目し、これからの日本の農業のあり方について「追究の視点」を基に議論することで、互いの考えの問題点をつかみ、改善案について考えている。【思考・判断・表現】

(3)　展開（波線部は「回遊する学び」に関わる手立て）

学習活動と児童の反応（　　）	教師の働きかけと形成的評価（◆）
１　本時の学習の進め方について知る。　（５分） ・自分たちの考えについて早く話し合いたい。 ・他のグループの考えを聞いてみたい。	１　それぞれの考えに対する理解を深め、話し合いの内容を明確にするために、各グループの提案を事前に教室に提示しておく。（ＡＤ）
これからの日本の農業はどうあるべきか話し合い、それぞれの考えをよりよいものにしよう。	
２　日本の食料自給率を上げるためのこれからの農業のあり方について議論をする。　（30 分） (1)　ウが自分たちの考えを提案する。 【ウ：農地を集約し、需要の高いものを生産】 日本は国土の約４分の３が山地で、平地は４分の１しかないが、耕作放棄地（42 万 ha）や空き地（1364 ㎢）は増加している。この土地を集約し、農地にすることができれば大規模な農業が可能になる。小麦（15%）や大豆（６%）など自給率が低く、需要が高いものを育てれば、自給率は上昇する。農家の収入も上がり、消費者は国産の安心・安全なものを食べることができる。 (2)　エがウに理由や詳細について質問する。 ・広い農地で農業をするのは誰ですか？ ・安心・安全な農作物を育てることができますか？ (3)　エが自分たちの考えを提案する。 【エ：スマート農業で若い人を農業の世界に】 農業人口は 10 年で 100 万人減少し、平均年齢は約 67 歳である。スマート農業を多くの農家で取り入れることができれば、収穫量は安定→増加していく。収入が安定→増加していけば、農家を継いだり、新たに目指す人も増えたりしていくだろう。スマート農業の費用は国が全額支援するようにし、消費者は若い人が作った農作物を積極的に買うようにする。 (4)　ウがエに理由や詳細について質問する。 ・スマート農業化が進まない理由について詳しく教えてください。 ・若い農家さんが作ったものを見分ける方法は？ (5)　意見交換（賛成意見や問題点、それに対する改善案）を行う。 ・若い農家さんを国や消費者が応援することに賛成です。スマート農業は今いる農家さん達も助けることができます。 ・一人の大きな農家さんに集約した土地で農業をすることは、難しいので、多くの農家さん達に少しずつ農地を広げてもった方がいいと思います。	2-(1) 提案内容が理解できるように、児童の手元に各グループが提示する資料を配付する。 2-(2) 児童の発言のポイントになる言葉を板書したり矢印でつないだりすることで、各グループの考える食料生産のあり方の可視化を図る。（ＡＤ） 2-(3) 説得力のある提案になるように、「実社会の問題」と「解決策」、「理由と根拠」を図式化したものを提示しながら発言するように促す。（Ｂ他者） 2-(4) 議論の内容を整理するために、必要に応じて児童の発言に対し、補足や問い返しをする。（ＢＣ） 2-(5) 「追究の視点」【実効性】【実現可能性】【連携性】に合わせてウとエの考え方を評価できるようにルーブリックを用いる。 2-(6) ルーブリックを基に評価を行っているアとイの児童にも質問や賛成意見、問題点とその改善案について発言を求めるようにする。 2-(7) 相手の考えの「理由と根拠」に注目しながら、「追究の視点」を基に賛成意見や問題点、それに対する改善案を述べるように促す。（Ｂ他者） 2-(8) 問題点の指摘に終始する討論にならないように改善案はないか尋ねる。 ◆　理由と根拠に注目し、「追究の視点」を基に互いの考えの改善案について考えているか。（ノート、発言）【思・判・表】 Ｂ　図示された理由と根拠に注目し、「追究の視点」を基に相手の考えの改善案を考えている。 Ｃ→　相手側が示す理由や根拠の中で疑問に感じたことはないか問う。また、どの「追究の視点」を基にすれば、その問題点の改善案について考えることができそうか友達の意見を取り入れるよう促す。 2-(9) 現在の日本における農業のあり方との違いや補助金、コストの比較等が話題になった際は、ＬＰに意見を求める。（Ｄ他者）
(5)　意見交換（賛成意見や問題点、それに対する改善案）を行う。 ・全額を国が補助するのは難しいから、消費者が応援できる方法を工夫したいね。 ・どの考え方でも食の安心・安全は大事にしたいね。 ３　ＬＰからの評価を受ける。　（５分） ・酒井さんが指摘した課題を解決する方法を考えて、意見文を書きたい。 ４　今後の学習の進め方を確認する。　（５分） ・酒井さんが指摘した課題を解決する方法を考えて、意見文を書きたい。	3-(1) 費用に見合った効果があるか、実現可能かなど議論に用いた視点を踏まえて評価してもらう。（Ｄ） 3-(2) ＬＰからの評価の中でポイントとなる言葉を「追究の視点」ごとに色分けして板書することで、問題点の可視化を図る。 ４　次時では一人一人がこれからの食料生産についての意見文を書き、ＬＰや多くの生産者、消費者に向けて発信することを確認する。